

おまえを逮捕する

2007(平成19)年3月9日鑑賞(東映試写室)



監督=ソン・ヒチャン/出演=キム・ミンジュン/ホ・ジュノ/チャン・ハンソン/ナム・サンミ/キム・テウク/ユン・テヨン/アン・ネサン/ユ・ヘジン/パク・サンミョン (メディアファクトリー配給/2005年韓国映画/112分)

……韓国テイスト満載の韓流刑事モノは、感情の表現が直線的で、喜怒哀楽がいっぱい。刑事が健忘症というのはちょっと困ったものだが、その屍を乗りこえていく若手の刑事魂は立派なもの。また、かわいい婦警さんも大活躍。捜査の原則からは若干脱線気味だが、面白ければそれでいい、か……？

韓国テイストの刑事モノは……？

ハリウッドでも日本でも刑事モノは娯楽映画の定番だが、韓国の刑事モノにはやはり韓国の香りがプンプン……？ その香りの素の第1はやはり人間性で、昨年大ヒットしたポン・ジュノ監督の『グエムル 漢江の怪物』(06年)に典型的に見られるような、韓国人のひたむきさ・がむしゃらさが刑事モノに最適。また日本人と違って、感情をモロに表現する韓国人気質が刑事モノにピッタリ……。

第2は、弁護士の私の目から見れば若干問題ありだが、刑事訴訟法の手続や警察内部の取り決めを多少無視したり、逸脱しても、正しい目的のためならやむをえないという面白さ(?)があるところ。もっとも、これはハリウッド映画の『ダーティハリー』(71年)のハリー・キャラハン刑事や邦画の『アンフェア the movie』(07年)での篠原涼子扮する雪平夏見刑事も同じだが……？

この映画のテーマは……？

この映画のテーマは、あまりにも単純なそのタイトルどおり。そして犯人逮捕に情熱を燃やす人間味あふれる捜査3課の刑事たちの姿を描くこと。その主人公

となるのは、若手刑事のキム・ホンジュ（キム・ミンジュン）と15年のベテラン刑事のムン・ボンス（ホ・ジュノ）。ホンジュは犯人を瞬時に見抜くことができる特異な能力を持っているというキャラだが、私に言わせるとそんな自信が1番危険……？ 他方、ムン刑事は、過去数百人を逮捕した経歴を誇っているが、日に日に悪化する健忘症に苦しんでいるという設定。しかし、そりゃ刑事という職業にはかなりヤバイ病気で、それを放置したまま捜査の第一線に就くのは無謀では……？

考課点数ってホント……？

3課の班長ユク（チャン・ハンソン）は、口は悪いが根は部下思いのやさしい人物。しかし、警察もお役所だから予算で動いている以上、実績をあげなければ予算を削られるのは当然……？ そのため、韓国の警察には考課点数という制度があり、各チームが実績を競っている。その点数は犯人たちの罪質で異なり、重罪であればあるほど高くなるとのこと。そんなワケで、ユク班長はいつも「成績をあげろ！」と部下たちにハッパをかけているが、それは、そうしないと捜査費を削られるため。もしホントにこの考課点数という制度があるなら、それは日本と大違い。こんな競争原理は、この映画で見られるように何が何でも逮捕を目指し、成績をあげるといふ弊害が生じる面もあるが、検挙率が次第に下がり、親方・日の丸意識が広がっている日本の警察（？）の改革のためには、このような競争原理の導入も1つの方法かも……？

ガス缶はちょっとかわいそう……

3課が一気に考課点数を稼ぐチャンスがやってきた。それは、ホンジュが麻薬密売の犯人たちの手がかりを嗅ぎつけたため。こんな時、まず警察の捜査網にかかるのは、第一線で動いている密売人。そこで、逮捕されたのはガス缶と呼ばれている密売人（ユ・ヘジン）だが、彼らをいくら起訴し有罪としてもあまり意味がない。なぜなら、その背後に隠れている密売組織そのものを挙げなければ、密売人が変わるだけで、麻薬密売はなくなるから。

ところが、ガス缶はガンとしてそれについて口を割らない。そして、「密売で刑務所に入っても1年か2年だが、組織の内容を警察にチクったら組織から消さ

れてしまう」というガス缶の言葉には、妙に真実味と説得力があるからやりにくい。ホンジュやムン刑事たちはそんなガス缶を何とか説得して、背後にある国際的な麻薬組織とそのトップにいるソ・テドゥ（ユン・テヨン）のことをやっとな聞き出すことに成功したが、ガス缶はかわいそうに……？

前半の主演はムン刑事だが……

この映画のプレスシートには、ムン刑事の病気を健忘症と紹介しているが、その程度はさまざまで、『明日の記憶』（06年）のような若年性アルツハイマーになると大変……。健忘症のムン刑事が、コトあるごとに「あれがない、これがない」と騒ぎたて、周りから「またか」と冷たい目で見られている姿を見ると、今年58歳になる私も我が身につまされるが、それはなぜ……？

それはともかく、ライターがない、ハンカチがない、ティッシュがないというレベルならともかく、「拳銃がない」となると大変。「まさかそんなことが……」と思うが、この映画を観ていると、なるほど「こんなケースで忘れるのか」と妙に説得力のあるシーンが……。そこから生まれた大失敗をかばってくれたのがユク班長とホンジュ、そして「俺には犯人逮捕しかできない」とムン刑事自身が必死に頼み込んだおかげで何とかクビを免れたムン刑事は、今まで以上に麻薬密売組織のトップ、ソ・テドゥの逮捕に執念を燃やすことに……。しかし、こんな風に功を焦ると、ややもすれば単独行動に走り、ミスが出るもの。たった1人でテドゥが所有する美術館の中に忍び込み、重大な証拠を掴んだムン刑事だったが、逃走する時、何と拳銃を忘れていたわ、車のキーを抜き忘れていたわ、というミスのため、無惨な結果に……。

ひき逃げ課の婦警も大活躍……

この映画には、ホンジュの恋人のテヒが登場するが、これはホンジュの警察での仕事がいかに忙しく過酷であるかを強調するためのホンのお飾り……？ これに対し、上司と自分の2人しかいないというひき逃げ課に配属された婦警のイ・ヘリョン（ナム・サンミ）は、ある日発生した盲導犬がひき逃げされたという「事件」をめぐる、犯人逮捕に執念を燃やして大活躍。上司からアドバイスを

もらって、地道かつ自分の足で稼ぐ物的資料収集の結果、遂にヘリョンはひき逃げ車のナンバーを辿り当てることに……。そして、一瞬のスキをつけて車の中に乗り込み、「この車はひき逃げ車だから押収する！」とタンカを切ったものの、そんな荒っぽい捜査で犯人逮捕ができるの……？

だって、その車の所有者は、ホンジュとムン刑事が麻薬密売組織のトップ逮捕に執念を燃やす、あのテドゥの車だったのだから……。

■後半はホンジュ刑事が大活躍……

ムン刑事の敵討ちをしようと、警察が総力をあげてテドゥの事務所を家宅搜索したが、1袋の麻薬も発見できなかった。本来なら、こんな大失態をしでかせば、警察のトップが引責辞職しなければならないはずだが、韓国の刑事モノはそんな細かいことは無視……？ さらに、大切なバディ（相棒）を失ったホンジュは、1人でテドゥの部屋に乗り込み拳銃を向けるものの、テドゥから「撃てるものなら撃ってみろ」と言われると、到底それはムリ。こんなホンジュ刑事を見ているとかなりヤバい行動が多く、問題ありだが、韓国の刑事モノはそれも熱意の表れとみなしてオーケー……？ それはともかく、映画後半はそんなホンジュが大活躍し、テドゥたちと対決することに。このハイライトシーンにおける、ホンジュとヘリョン婦警との共同の闘いぶりをタップリと楽しみたいもの……。

■最後のオチは……？

15年のベテラン刑事のムン刑事は「現場百回」を実践するタイプだし、その教えを受けたホンジュも実践派・肉体派で、『007』のジェームズ・ボンドが持っているような近代的・科学的アイテムは使用せず、せいぜいケイタイだけ……。したがって、重要な証拠を発見し応援を求めようとしても、ケイタイをかけるヒマがなければ、それすらできないというお粗末さ。ところが、最後に危機的状況に陥ったホンジュを救ったのが、同僚の刑事から身体につけられていたGPSだったというのは面白いオチ……。さらに、事件すべてが解決した後、打ち上げの焼き肉パーティーにおけるオチも面白い……。これも韓国風刑事モノの1つの特徴……？

2007(平成19)年3月10日記